

会長就任にあたって



会長 江崎 次夫

このたび中島勇喜山形大学理事・副学長の後をついで日本海岸林学会会長に就任することになりました。そこで、これからの日本海岸林学会の方向性について若干考えを述べさせていただきます。会長就任のご挨拶とさせていただきます。

学会の基本姿勢は、中島前会長の就任時のものを引き続き踏襲してまいりますが、これからはその基本に多くの枝葉をつける時期にあると考えます。

我々が海岸林について議論をする場合には、海岸林が流域の河口部分に位置しておりますので、常に流域全体のなかでの位置づけを明確にしておくことが求められます。このことは、中島前会長も就任の挨拶のなかで詳しく述べられています。つまり、海岸林は、流域内の河川上流部の土砂の生産・移動と密接に関連して形成された河口部の砂浜や砂丘に成立していることを、常に念頭に入れておかなければならないということでもあります。

このような変遷を経て形成された河口部の砂浜や砂丘に成立する日本各地の海岸林では、今、海岸林の主要構成樹種であるクロマツがマツクイムシの被害によって松枯れの状況であることは周知のとおりです。クロマツに優る樹種が見いだされていない現状では、薬剤散布や手入れ不足の解消など、徹底した維持管理が必要であると考えます。最近では抵抗性のクロマツや、これに菌根菌を接種し、より抵抗性の増大したクロマツも開発されてきています。また、東日本の東北、北陸地方を中心に海岸林に広葉樹を活用する研究も進展が見られます。このような研究に多くの会員が携わっており、近い将来素晴らしい成果が得られるものと期待しております。

日本海岸林学会では、会員による海岸林に関する研究の進歩・発展のみならず、その成果を地域社会に還元する地域貢献も大きな柱になっています。そのためには、河口部の海岸砂丘地のみならず、流域内の森林、海岸丘陵地林、河畔林や海畔林なども含めた広い視点から海岸林についての議論が必要であると考えます。つまり、本学会は中島前会長が述べられていますように「現場密着型の泥臭い実学的な学会」であります。すでに、佐賀県の虹ノ松原の海岸林や山形県庄内砂丘地の海岸林で、多くの会員が地元の人々と一緒になって海岸林の手入れや、将来を担っていく小中学生達に環境教育を行うことなどの実践につながっています。

また、西日本では、南海、東南海地震の発生が早ければ30年後位に予測され、これに伴って海岸地域では津波の被害も懸念されています。その被害の軽減には海岸林が有効であることは、これまでの日本海中部地震やスマトラ沖地震に伴う津波被害からも実証されています。学会としても積極的に海岸林の造成や整備を関係機関や地域住民に呼びかけていかなければならないと考えます。このような活動を通じて海岸林に関わるいろいろな立場の人たちと連携を深めていく必要性が求められます。我々の学会は、研究が主体になっている既存の学会と異なり、多くの人達に門戸を開放しています。このことは地域貢献や会員の拡大にもつながるものと考えています。

最後に、会員の皆様には、日本海岸林学会が21世紀の海岸林の行く末に責任を持てる学会として、発展充実できますようご協力をお願い申し上げます。